
夏の終わり

ニッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の終わり

【Nコード】

N5266A

【作者名】

ニッシー

【あらすじ】

中学三年生の橘真由美は前の年と変わらない夏を送ろうとしていた。しかし真由美の彼氏の坂下博和は真由美とその親友の春菜を損ないこの世界から消し去ろうとしていた。博和は幼い頃に真由美と春菜にいじめられた過去があり、それによって博和は損なわれ、損なわれたものが集まる世界に入り込んでいる。そこでは健人と名乗っている。損なわれたものが集まる世界にいる「僕」は博和自身から真由美と春菜を殺す話を聞き、それを止めようとする。僕は健人を鉄パイプで殴り殺す。しかしその損なわれたものが集まる世界で

殺されたものは、現実世界の自分も死んでしまうことになる。

第1章 光の中で（前書き）

奇数章では中学三年生の夏を迎えた真由美の夏の物語。偶数章は「僕」が少し変わった世界で繰り広げる物語。二つの話はどこかでつながっています。

第1章 光の中で

第1章 光の中で

「あのね、ちょっと真剣な話があるんだ。」

坂下博和は少し驚いた顔をした。真由美が真剣な話を持ちかけてくるのは初めてだな、とても思ったのだろうと隣にいる橘真由美は考えた。

博和とは同じ中学校で同じクラスだった。顔もよく、勉強ができてスポーツもできて、人を笑わす冗談も言える。どこの学校にも一人はいそうな男子だった。

「真剣な話？真由美が真剣な話をするなんて珍しいね。というより初めてだよ。」

「初めて？そうかな？ていうか珍しいってのはひどいよ。わたしだってそういうこと考えたりすることあるんだからね。少なからず。」
今日、七月の三十一日に二人はデートという形で映画を見に行った。今は帰りの電車の中にいる。冷房が効いていて、客はまったく乗っていないかった。窓の外から夕日が差し込んで二人を正面から照らしていた。

博和はざっと付き合い合った月を計算した。去年の7月から付き合い始めて、一年と一ヶ月になることを五秒ほどで計算した。

「付き合い合ってから十三カ月、一年と一ヶ月になるけど初めてだね。で、なんなの？真剣な話って。」

真由美は博和のほうを見た。夕日の光が博和の瞳の中に吸い込まれていき、反射して、光っているように見えた。

「うん。あのね付き合い始めた日のこと覚えてるよね。博和が私に告白した日、去年の七月の三日だよな。」

「あー、覚えてる覚えてる。で、その日がどうしたの？」

「その日の夜のこともただけだね。あの、真剣に聞いてよ。本当のことなんだから。その夜に私の部屋に男が来たの。浮気とかそんなじゃないからね。本当に男が来たの。知らない男がね。」

真由美はそこまで言うのと、小さなため息をついた。隣の車両を見ると、七十歳はいつてそうな老人が座っていた。老人の乗っている車両には、老人以外に誰も乗っていないかった。老人は本を持っていた。その本を開いたり閉じたりしていた。真由美には、その老人はその本を開いたり閉じたりするのが、何かの使命なのかという風に感じた。本を開いたり閉じたりする使命。そこまで考えたところで、老人は何の前触れもなしに、強く本を閉じた。ぱん！という気持ちいい音が電車の一両越しに無音の音として伝わってくる気がした。真由美は老人が強く本を閉じる動作を見て、老人に対する思考回路を停止させた。顔を正面の夕日に向け、次に話すべき言葉を搜す。

「夜の何時かは覚えてない。でも十二時以降だってことはわかるんだ。私は十二時に寝たから。それでね。突然目が覚めたの。目が覚めたっていつても、目は半目しか開かなかった。変だなって思ったよ。だつて寝るときに電気を消したはずなのに点いてるんだよ。したらね、なんていうか、言い表しにくいな。うとうううっていう音がしたんだ。まるでね、世界の終わりの深い闇の淵から湧き上がった音みたいな感じ。もちろんベッドの上から起きて何なのか確かめようとも思っただけど、体が動かなかったの。」

真由美は肩にかかっている髪を少し払いのけた。さらさらとした髪が肩から下のほうへ落ちる。

「ここまで聞いて博和はさあ、どう思う？」

博和はこめかみに右手の人差し指を当てて真面目な顔で考えていた。なにかを考えるときの博和の癖だった。

「誰かのイタズラの可能性もあるように思えるな。世界の終わり・・・
・ なんてらの表現の仕方が、いまいちおれにはわからないな。」

「あなた馬鹿だからね。わからないのね。そういうの。」

「おれのほうが勉強の成績いいんだけど？」

「あのね。そういう馬鹿とか言ってるんじゃないのよ。たしかにあなたのほうが成績はいいよ。それはわたしも認める。でもね、勉強以外では充分馬鹿だと思うけどね。わたしは。」

「きつい言い方するなあ。でも3年の学年なんてみんなそんな奴ばっかりだろ。勉強できても馬鹿な奴なんてうじゃうじゃいるよな。」

「博和は最高にマシなほうだと思うよ。本当にあそこは馬鹿な人間が多いからね。男子が。」

「同感だね。異議なし。」

博和は大げさに首を縦に振りながらうなずいた。

真由美は自分の胸に手を押し当てた。柔らかな感触が手に伝わってくる。いったん途切れた話の続きを考えたが、思いつかなかった。言うべき言葉が頭の中で漠然と浮かんでくるが、真由美にはそれを声に出して言えなかった。隣の車両を見ると、老人がまた本を開いたり閉じたりをしていた。

「ごめん。さっきの話の続きなんだけど。また今度でいいかな？」

「どうして？」

「今話したくないのよ。今話すと、とりあえず駄目だと思うの。何でかは、わかんないけど。」

「じゃあまた今度でいいよ。」

このような話を持ち出して博和がまったく驚いた顔をしないのが、真由美には不思議だった。そのことを聞こうかと考えたがやはり聞かないでいることにした。

「ごめん。ありがとうね。あの、この話を一通りして、話し終わっても嫌いになったりしないでね。わたしのこと。」

「大丈夫だよ。何言ってるの。嫌いになるわけないよ。」

博和は隣に座っている真由美を抱き寄せた。真由美は誰かに守られているんだという感じがした。少なくとも今はそんな気がした。

終点の駅に着くまで二人はその抱き合ってる姿勢をまったく崩さなかった。

終点の駅に着いた。真由美と博和は同じ地域に住んでいて、家もそれほど離れていなかった。

駅から少し坂を下のほうへ行ったところにある交差点で二人は別れる。

「そういえば前貸してくれたあの本、何だっけ？」

「異邦人。」

「そうそれ。読み終わったよ。また今度返すね。」

真由美はそういつて博和に抱きついてキスをした。その交差点には二人以外に人はいなかった。

「じゃあね。今日のデートは楽しかった。」

「じゃあな。ばいばい。」

二人は別れた。真由美は空にある夕日の光を見上げながらあるいた。夕日はその淡い光を真由美を照らしていた。光が真由美を包み込む。その遠く離れた別の人間をも照らしている淡い光はあと少しで命が尽きるような感じで存在しているように思えた。真由美はいずれ消え行く、光のことを考えた。

そのときだった。そのようなことを考えていると、真由美は何か体がから抜けていく気がした。脱力感のようなものを感じた。体の中のあるとあらゆるものが、その光の中に存在する何かによって奪われていく気がした。真由美は博和のことを考えた。心の中で「博和」と大声で叫ぶ。すると急に体の中が暖かくなりもとの正常な状態に戻ってきた。

「やれやれ………。はあ。」

発した言葉が空中に消えていく。

真由美は走り出した。風を切って、地面から伸び自分を捕らえようとすると触手から逃げ出すように、その場所から走り出した。本当に触手が伸びてきて捕まえようとしたかもしれない。しかしそのときの真由美にとってはそんなことはどうでもいいことだった。今は一刻も早く家に帰ったほうがいいと思った。

真由美を照らし、包み込んだ夕日はいつまでも、そこに、ずっと、
何かの余韻のように漂っていた。

第2章

第2章

中学のとき。僕は彼女のことを好きだった。僕の考えてることはいつも彼女のことだった。

彼女は人気者だった。みんなから認められ、僕も認めていた。彼女は初恋の人だった。

中学生になり彼女へ対する自分の感情に気付いたのは中学の一年生のことだった。

僕は教室の鍵を閉める係をやっていた。季節は夏だった。廊下側の窓の外には、緑の葉が生い茂っていた。僕はその眺めが好きだった。「ちよつとゴメン！」

走りながら戻ってきた彼女が言った。音楽の移動教室で僕が鍵を閉めようと思ったときに彼女は来た。

「ノート忘れちゃったんだけど。ちよつと待ってくれる？」

「いいよ。」と僕は言った。

彼女が僕の横を通り過ぎるときに彼女の髪のおいがした。よくわからないが不思議な感じのするにおいだった。

彼女が自分の机でノートを探しているときだった。

そのとき初めて彼女のことを好きだと思った。

理由はわからない。彼女がノートを探している姿を見たたん、僕の体には何かわからない不思議なものが降り注いできた。ただ純粹に好きだと思った。

心臓が大きく鼓動するのが感じられた。手が震えていた。僕は彼女に見入ってしまったていた。

「あつたあつた」と彼女が言った。

「あの、ごめんね。」と言った。

「あつ、うん。いいよ。」と僕が言うなり彼女は走っていった。窓から差し込む光を浴びながら、音楽室へとやわらかい髪を揺らしながら走っていった。

その日から彼女のことしか頭になかった。授業中も彼女の後ろのあたりの席なら彼女のことをずっと眺めていた。

僕の中には彼女しかいなかった。彼女がいないと僕の存在意義がないように感じられた。

彼女は僕に見向きもしなかった。僕はあれだけ好きだと心の中で考えたのに。

今部屋の中に僕はいる。ベットに横たわって本を読みながらふと彼女のことを思い出した。

今どこにいるかもわからない。

僕は彼女のことを好きだった。彼女は何も気付かなかった。僕と彼女は見えない障壁でふさがれていたのだろうか。

彼女は今どこかにいる。この世界のどこかにいる。

僕と彼女は今生きている。何かを隔てて生きている。

そんなことを考えてると急に眠くなった。

僕は静かに目を閉じた。

「キミは僕のことを思い出しているのかな。僕は君の事を忘れていた。少し。ただ少し、忘れていたんだんだ。」

深い闇がやってきた。僕はゆっくり、しかし確実に、深い闇の中に入り込んでいった。

第3章 夢の中の損なわれた男

第3章 夢の中の損なわれた男

真由美が走って家に着いたのはちょうど4時30分ごろだった。玄関で靴を脱ぎ居間のほうに行くと真由美のお母さんの由香里が、晩御飯の準備をしていた。

エプロンをつけて唐揚げを揚げている由香里は一旦作業を止め、振り向きながら言った。

「あら、帰ってきたの。映画はどうだった？」

「あー、あれね。うん。おもしろかったよ。」

真由美は息を荒くしていた。博和と別れた後、家まで全速力で走ってきたからだ。額から汗が噴き出ている。

「なんでそんなに息が荒いの？ あら、汗も出てるじゃないの。」

真由美はソファーに座り、荒く息をしている。

「うん。あのね。はあ、ここまで走ってきたの。家まで。」

「こんなに暑いのにわざわざ走る必要なんてないでしょ。」

由香里は呆れたように言った。そして振り返り、から揚げを揚げる作業にもどった。

「ねえ、ほかにはどうだった？ 博和君といろいろやっちゃった？」

「いろいろってなによ。」

「もう！ どうせわかってるんじゃない？」

「はいはい。わかんないですよ。」

「ふーん。まあいいわ」

真由美はまだ息が荒かった。家の外のほうから小学生の子供の笑い声が聞こえている。窓からは夕日が家の中に差し込んでいた。

真由美はソファーから立ち上がり大の字になってごろんと床に寝転んだ。クーラーが効いていて涼しかった。

真由美が顔を横に向けると、そこには綺麗にたたんで積み重ねてあるタオルがあった。洗剤のいいにおいがした。

「ねえ、このタオル一枚使っていい？汗拭きたいんだけど。」

「それよりシャワーしてきなさいよ。そのほうが気持ちいいよ。さっぱりするし。」

真由美は大の字の状態から動きたくなかったが、ぬるま湯でシャワーするのも結構気持ちよさそうだろうなと思い、立ちあがった

「あっねえ、着がえの服持ってきてくれない？」

「わかった。洗濯機の上に置いとくからね。」

「それとさあ、私の部屋のクーラーつけておいてくれない？さっぱりした気分で部屋に入ったら暑苦しいなんて嫌だからさ。」

「はいはい。わかったから。さっさとシャワーに行つてらっしゃい。」

「

風呂場に行くと真由美は着ているものを脱ぎ洗濯機の中に入れた。そして扉をあけて中に入った。

シャワーの温度をぬるい目くらいに調整してから真由美はシャワーを浴びる。

水が飛び出し、真由美の体に当たる。

「あはー。気持ちいい。」

自然とそんな言葉が漏れてくる。息が荒いのはもうすでに収まっていた

真由美は立ったままシャワーを浴び今日の出来事を思い出す。

頭には電車の中に一人で本を開いたり閉じたりする老人のことが引っかかっていた。老人が強く本をパンと閉じてからは一度も老人のほうを振り向いていなかった。その老人がいつ電車から降りたかもわからなかった。真由美はシャワーを頭から浴びながら考えたが、そんなことを考えても無駄だと思った。あの老人とたぶんもう会うこともないだろうと思った。第一真由美は老人がどんな姿をしていたのかも思い出せなかった。

シャワーを終えて着替えて真由美は自分の部屋に上がった。真由美の部屋は二階にあり、階段をあがったところに部屋がある。

部屋に入ると冷房が効いていて涼しかった。真由美はベッドに寝転んで、枕の横にある携帯電話を開いた。

真由美は今日、博和とデートに行ったが携帯を忘れていった。行き電車のなかで忘れてきたことに気付いた。いまさらとりに帰るのも無理だな、と思いそのままだった。時刻は五時を過ぎたところだった。不在着信が1件入っていた。電話をかけてきたのは、真由美の小学校からの友達で同じクラスの森山春奈からだった。電話が来たのは4時48分だった。ちょうどシャワーを浴びていた頃だ。

真由美は電話をかけようかとも思ったが眠かったのでやめることにした。真由美はそのまま目を閉じ少しの間の浅い眠りについた。

真由美は由香里に体を揺らされて起きた。

「寝てたのね。ご飯だから下りてきなさい。」

真由美は時計を見た。時計の針は6時35分を回ったところだった。お母さんが階段を下りて行つてすぐにベッドから出る気にはなれず、真由美はまた目を閉じ眠りについた。

真由美は夢を見た。男に追いかけてナイフで刺されるといふ夢だった。真由美はその男から逃げ自分の家の近くまで来たが、男に捕まえられて心臓の辺りを刺された。そのときの男の顔はまったく知らない顔だった。一つわかることは、追いかけてきた男は真由美と同じ年くらいの男の子だということだった。綺麗で端正な顔立ちをしていた。

「お前は俺をひどく損なってくれた。だから俺もお前を損なってる。俺以上に損なってる。」

その男は刺す前にこう言った。そして刺される。刺された瞬間に目が覚める。

目が覚めてもしばらく真由美は、天井をじつと見つめていた。男の言った言葉が頭の中で響いている。

冷房は切れていて、部屋は暑かった。真由美は誰かを損なった覚えなどなかった。「損なう」というものが、どういうものなのか今の真由美には見当がつかなかった。

そこまで考えて夢であつたというのを思い出す。すべては夢であつたことであつて、この現実世界には関係のないことなんだと真由美は自分に言い聞かせた。

「夢なんだよ。ねっ深く考えることはないよ。」

真由美はわざと口に出していつてみる。その言葉は暗い部屋の天井に吸い込まれていった。

時計を見ると9時を回つたところだった。真由美はゆっくりとベッドを下り、ゆっくりと階段を下りた。下の居間に降りると由香里は座つてテレビを見ているところだった。

由香里が真由美を見上げながら言った。

「よく寝てたわね。お腹空いてるでしょう？晩御飯残してあるからね。今食べる？」

その由香里の言葉を聴いて真由美は現実に戻ってきた気がした。さきほどの夢に対する思考回路を停止させる。由香里の横に座りながら、

「うん。食べる。」

と言つた。起きたばかりで居間の電気の光が眩しく感じられた。

テレビのニュースでは中学生が自殺をしたということを放送していた。

「よく簡単に命が捨てられるわねえ。」

由香里が顔をしかめながら言った。

「でも自殺するつてのは相当な決意がないとできないだろうね。死ぬ決意かあ。真由美はそんなこと考えちゃ駄目よ。」

「考えることになるかもしれないよ？」

真由美が笑いながら言った。

由香里はしばらくずっとテレビを見ていた。そしてこう言った。

「そのときは私が殴ってでも、首絞めてでもその考えを止めてあげるわ。」

「絞め殺してしまわないようにね。」

「気をつけるわよ。あつ晩御飯の準備ね。お腹空いてるんでしょう。」

「

ご飯を食べ終わって真由美は二階の自分の部屋に上がった。真由美は机に座り読みかけの本を読んだ。

気付いたときには時計の針は11時57分くらいだった。すこし読みふけりすぎたなと真由美は思った。

そのとき携帯電話が鳴った。博和からだった。

第4章

第4章

ある日にその人物と出会った。僕はその人物が誰かということが一目見ただけでわかった。歩いているときに道端でばったりと出会った。まるで誰かの心が、憎しみの念でいっぱいであるということを表しているように、空は晴れ渡っていた。

「俺が誰だかわかるよな？」

綺麗な顔で美男子とも言える顔つきだった。髪の毛は暗黒の色のように黒かった。上はパーカーを着てジーンズを履いて、靴はスニーカーを履いていた。僕はしばらくしゃべれなかった。走って逃げ出そうとも考えたが、体が上手く動かなかった。

「まあこんな道端で話すのもあれだからね。場所を変えようか。」男は歩き出した。僕もついていく。危害を加えたりはしないだろうと思ったからだ。もしかしたら男に体を操られていたのかもしれない。しかしそのときはどうでもよかった。

どれだけの距離を歩いたかもわからなかった。僕はただ、その男の背中を見て歩いた。

気付いたときには学校に来ていた。ひどく朽ち果てた学校だった。廃校になっていることは一目瞭然だった。

その朽ち果てた学校の体育館裏に僕たちは歩いていった。

体育館裏に来ると男は歩くのをやめ、辺りを見回す。男はこめかみに人差し指を当てながら何か考え事をしているような素振りを見せていた。

「ここに来てどれくらいになる？」

こめかみから指を下ろし、僕のほうに振り向きながら男はそう言った。それが僕への質問であると理解するまでに少し時間がかかった。僕は頭の中で計算する。ちょうど二年だった。

「二年くらいになる。」

男は大げさにうなずきながら、こめかみに人差し指をまた当てた。僕は思った。この男はあの男なのだ。

「君は名前はさあ、あの、たしか、」

男はあわてたように両手を出して僕を制した。

「待った待った。わかつているだろう。その名前は呼んじゃ駄目だ。うーん。じゃあお前は俺のことを何て呼べばいいんだろうな……。うーん。うーん。そうだな。よし、じゃあ俺のことはムルソーと呼んでくれ」

ムルソーと名乗ったが顔はどう見ても普通の日本人だった。

僕はわからなかった。この男がなぜここにいるんだ？

「なんでここにいるんだ？」

僕の発した声は普段の声とは幾分違った声のように思えた。

「なんで？つて。お前わかつてるだろう？ もうおれはここにいて8年になる。8年もこの世界にいるんだよ。この深い闇の淵にな。」ムルソーという男は笑いだした。小さな声で、僕たち以外にはわからないような小さな声で笑った。

「なあ、お前もあいつにやられたんだろ？ まあ俺にとっては『あいっら』だけだな。こういうときはやられたもの同士手を組むべきだ。」

笑いながらそう言った。なにかもを察しているようだった。

「お前を捜すために俺は暗くて深いこの世界をさまよったんだ。ずっと。やっと会えたんだ。お前と俺は同志みたいなものだよ。」

彼は体育館の壁を拳で軽く叩いた。そしてこう言った。

「同じ、損なわれた者同士な。」

第5章 不吉な電話

第5章 不吉な電話

不吉なものを運んできたかのようにその電話は鳴った。その電話が鳴ったとき真由美は不吉なものを感じた。

辺りは静まり返っている。静かなのがなお、不吉さを際立てているように思えた。真由美はゆっくりと携帯を開く。携帯の液晶画面には坂下博和という名前が写っていた。

「もしもし。」

「あつ真由美。今何してるの？」

「本読んでただけど？」

「本か。なるほど。」

博和は笑いながら言った。

「どうしたの？ なにかいいことでもあったの？」

「そんなことはどうでもいいんだよ。なあ、もうすぐ12時だろ。」

真由美の言う、世界の終わりなんたら男が来ないかと心配してだから電話したんだ。」

「あら、ありがとう。でも窓の鍵も全部閉めてるし大丈夫だよ。」

「そっかそっか。よかった、それなら安心だ。」

いつもとすこし声の感じが違うなと真由美は思った。

「あのさあ。本当にどうしたの？ 頭おかしくなっちゃった？」

「どうもしてないよ。いつも通り俺は正常だよ。」

「ならいいけど。あつそうだ明日プールに行かない？ 私と晴菜と博和の三人で。」

少しの間の沈黙が流れた。博和は電話の向こう側で黙っている。

「博和？」

「あつ、あ、うん。で何？」

「私の話し聞いてた？」

「聞いてたよ。明日は無理だ。友達の家遊びに行くから。」

真由美はため息をついた。博和に聞こえるような大きなため息で。

「なんかさあ三人で遊びに行こうって言ったとき、いつも断るよね。あの、もしかして晴菜のこと嫌いなのか？それとも私？」

「え？ぜんぜんそんなことないから。うん。ぜんぜんない。」

「本当に？まあいいや。じゃあ明日は春菜と一緒に帰ってくるね。可愛い女の子二人の水着姿が見れなくて残念だね。」

「まことに残念だよ。あの、読書の邪魔して悪かったな。」

「構わないよ。じゃあねおやすみ。」

「うん、おやすみ。いい夢が見れるようにな。」

「お気遣いありがとう。じゃあね。切るよ。」

真由美は春菜に電話をしてプールに遊び行く約束をした。晴菜が10時ごろに真由美の家に来て一緒に行くというものだった。

電話をし終わった後も真由美は、博和からの電話が来たとき感じたあの不吉な感じが、体の中を這い回っていた。

どうして博和からの電話を、不吉だなんて感じたんだろう？

そのような考えが真由美の頭の中を駆け巡っていた。真由美はその後本を読み終えて電気を消して、ベッドの中にもぐりこんだ。時計の針は1時50分をさしていた。真由美は眠った。深い眠りだったがそれでも3時過ぎまでのことだった。

3時にあの男が来た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5266a/>

夏の終わり

2010年12月30日19時14分発行